

満3歳児クラスにおける行事の中での子どもの育ち

林 美代・廣 瀬 三枝子

1. 研究の所在と目的

満3歳児入園は、保護者の要望や少子化対策の中で進められてきた。その時期、受け入れ方などは園の実情に応じて様々である。満3歳になった日に随時受け入れる園、春と秋のように入園時期をある程度区切って受け入れる園など、入園時期やその受け入れ方は園によって多様であるといわれる¹⁾。

本学附属幼稚園の満3歳児クラスは、仕事の関係で早くから入園する子どもたちと、3歳の誕生日を過ぎた子どもたちが毎月数名ずつ入園する体制のクラス運営を取っている。そのため、1学期は少人数ずつの子どもたちに丁寧に関わりながら情緒の安定を図り、幼稚園生活に慣れていくように配慮している。2学期からも集団人数は増えるが、毎月の新入園児を丁寧に受け入れられる保育者配置をとっている。満3歳児クラスとはいえ、保育所という2歳児クラスである。園の状況に合わせた配慮、クラスの子どもの状況への配慮、クラス集団との関連、入園前の状況など、配慮事項は多岐にわたるが、重点は、子ども一人一人の生活の仕方や生活リズムを尊重し、一人一人の心の揺れ動きに寄り添って、安心感、安定感、担当する保育者との心の繋がりをつくることだといわれている²⁾。そのため、緩やかな担当制の中で、情緒を安定させながら自己を発揮して徐々に集団での活動が楽しくなっていくよう心掛けている。特に個別の配慮が他の学年との違いであろう。

満3歳児の集団での遊びや活動については、個別の配慮をしながらも、保育者や友達と一緒に遊ぶ楽しさを十分味わえるようにすることが必要だと考えている。初めて経験する集団での遊びとの出会いは、何より子どもたちが心を動かして自らやりたい気持ちで行っていくことが大切であろう。

また幼稚園では、少しずつ行事に参加する機会が設けられている。満3歳児クラスは、保護者から離れて初めての行事である。楽しさを感じるだけではなく、集団で行うことに不安をもつなど気持ちが揺れ動くこともあるため、個別の配慮が必要である。できるだけ日々の保育の中で楽しんでいることを中心に、どのようにすれば子どもたちが行事に自ら参加でき、楽しめるかという視点を大切に考えながら計画するように心がけている。計画に当たって先行研究を見てみたが、牧³⁾や田澤⁴⁾、今村・森口⁵⁾などの現状の調査研究を中心としたものがいくつかあるものの、少ないのが現状である。

そこで本研究では、満3歳児クラスの保育記録から行事の持つ意味について、週のねらいや援助のポイントと子どもの様子などを基にして、保育における行事の中で満3歳児が集団を感じていく過程と、そのための保育者の援助について考察することを目的とする。「記録を取り省察することで、その時の幼児の思いを推し量るといった幼児理解を深めることや、そのときの教師の考え方や関わり方などが分かり、指導の改善に生かすことが可能となる」⁶⁾ので、満3歳児クラスでの行事を中心とした活動がどのように行われ、どのような子どもの育ちが見られるのか、そして翌年の年少クラスでの活動にどのように繋がっているのかを、満3歳児クラスの記録から読み解きたい。

令和5年12月19日受理
連絡先 〒769-0201 香川県綾歌郡宇多津町浜一番丁10番地
香川短期大学 子ども学科
TEL 0877(49)8049 FAX 0877(49)5252
Email hayashi@kjc.ac.jp

2. 研究の方法

(1) 研究対象

香川短期大学附属幼稚園の満3歳児クラスの園児及び保育に関わる教職員

(2) 研究方法

- ①行事における満3歳児クラスの子どもの様子を観察・記録する。
- ②子どもの様子や保育者の支援等を分析・考察する。
- ③行事における子どもへの影響（効果や問題点など）を考察する。

3. 満3歳児クラスにおける行事

(1) バスでのこいのぼりツアー

新入園児は、園バスに乗ってみたいという思いをもっていることが多い。満3歳児も同様に園バスに乗りたがって、4月当初から「ドライブしたい」と言っている子どもも多い。

そこで、今ではなかなか家で飾ることが少なくなったこいのぼりを、園バスに乗って見に行くツアーを5月入園の子どもを迎えた後に企画している。ちょうど、近くの丸亀城や土器川にたくさんのこいのぼりが見事に泳いでいる。満3歳児の子どもたちにとっては、初めて意識して見るこいのぼりかもしれないので、色々な話を添えて楽しめるように工夫している。こいのぼりを見た子どもたちは、こいのぼりを身近に感じて、色や大きさや模様など自ら気づいたことを保育者に伝えようとしてくれる。その感動を保護者にも伝えて、家庭でも会話が続くようにしたり、その後の保育の中でこいのぼりの歌を歌うなど継続してみんなでこいのぼりと親しむ活動を楽しんだりしている。

【事例1】(2022年5月18日)

週のねらい：バスで園外に出て、こいのぼりをみんなで鑑賞し、季節を感じたり、先生や友達との会話を楽しんだりする。

大切にしたいこと：バスの中での約束を周知し、安全に配慮しながら窓から見える景色や空を泳ぐこいのぼりを楽しみ、季節を感じたり、友達や先生と発見や気づきを共有したりする。

援助と環境構成：①バスでの約束事を視覚的なものを用いて伝え、安全に配慮し、その都度言葉掛けをする。

②子どもたちが楽しんでいること、気づきや発見を共有できるようにつぶやきに耳を傾ける。

「バスでお出かけをするよ」と話をすると、「何色のバスかな?」「紫のバスがいいな」「ピンクがいい」など、バスとの出会いを楽しみにする。バスからの景色をより楽しめるといいと思い、馴染みのある魔法の眼鏡（トイレットペーパーの芯で作ったもの）を持って出かけるようにすると、子どもたちも喜んで持って行く。

バスの中では、通る車に興味を示す子ども、魔法の眼鏡でじっと景色を見つめる子ども、行ったことのある場所や店を見つけ嬉しそうに知らせる子どもなどがいて、それぞれが心をワクワクさせながら過ごしていた。土器川のこいのぼりが近づき、魔法の眼鏡をかけて待っていると少しずつ視界に入ってきて、こいのぼりを見つけると「こいのぼり!」と発見の喜びから子どもたちは大興奮だった。土器川のこいのぼりより丸亀城のこいのぼりの方が自分との距離が近いと感じたようで、丸亀城前ではずっと手を振ったり「おーい!」と叫んだりしていた。子どもたちはたくさんのこいのぼりとの出会いを楽しんでいたようだった。

週のねらいとしても、季節を感じることを大切にしている。季節を感じられる活動の中での憧れの園バスとの出会い、楽しい本物のこいのぼりとの出会いの日であった。子どもにとって保育者と一緒の楽しい経験、嬉しい経験となったことであろう。この経験が、子どもに「幼稚園って楽しいな」「幼稚園に来たら、こんなことも出来るんだ!」という思いをもたらすのであろう。

また、バスには乗り方の約束事がある。約束事について知り、みんなで約束を守ろうとすることも、楽しい活動と同時に経験する。手すりをもって順番に階段の上り下りをするなど、バスでの約束事が日常の生活に繋がっていることもあり、体験として自然と身に付いていくのであろう。

(2) わくわくフェス（作品展）

満3歳児クラスのわくわくフェスでは、日々の保育の中で作ったり、描いたりしたものを含めて、子どもたちが楽しんできた遊びの軌跡を展示して、その場で再度遊んだり、見て楽しんだりできる空間をつくることを大切にしている。子どもたちにとっては、制作活動ではなく、どれも楽しい遊びである。そのため、保育者や友達と一緒に楽しみ、その時に作った物や飾った物などを展示して保護者に見てもらうことで、現在子どもたちがどのようなものやことに興味や関心をもっているのかを感じてもらえるようにしている。その場で保護者と一緒に楽しみ、思いを共有することで保護者が子どもの成長を感じられる時間になると考えているので、保護者に普段の幼稚園生活の様子を知ってもらう機会としても期待しているところである。

【事例2】（2022年10月11日）

週のねらい：①戸外で先生や友達と伸び伸びと体を動かして遊ぶことを楽しむ。

②音楽に合わせて踊る楽しさを友達や先生と味わう。

大切にしたいこと：フェスでいろいろな表現を感じ、アートの世界を楽しむ。

援助と環境構成：子どもたちと一緒に1つ1つの

アートの世界を楽しみながら、刺激をもらえるようにしたり、お家の人を招待したい気持ちを高められるようにしたりする。

わくわくフェスウィークが始まり、初日にみんなのアートを見に行った。年中児のパン屋さんコーナーにトングとトレイがあることに気付くと「これ見たことがある」と目をキラキラさせながらパンコーナー1つ1つを見たり、恐竜コーナーに「大きなのがいた、すごい!」と感動したりする姿があった。自分たちで作った魚釣りやジュース屋さんはお気に入り、で、「遊びたい!」と引き寄せられていた。

わくわくフェスウィークが始まったが、普段の遊びの延長として楽しんでもほしいという思いがある。普段の遊びとしては、体を動かすのにちょうどいい時期なので、週のねらいとしては戸外遊びのことが含まれる。

わくわくフェスの作品を見に行った際、子どもたちは年中児のパン屋さんに刺激を受けた。パン屋さんに行ったことがあるだろうから想像しやすかったのかもしれない。そこから年中児の作品に興味をもち、「大きくなったらやってみたい」と思ったことだろう。この日は火曜日だったので、気になったものについてじっくり見たり年中児にトングなどに触らせてもらったりして、フェスウィークを楽しんでいた。

ホールには全学年の作品が一斉に集まってくるので、様々な刺激を受ける。それぞれのブースでそれぞれの遊びが展開され、気に入った遊びのブースで仲間に入れてもらえるので、異年齢交流も可能である。そこで様々なことを教えてもらい、成長していく。水族館への興味から始まった自分たちの魚釣りコーナー⁷⁾やジュース屋さんのコーナーは、満3歳児が紹介したり遊びを進めたりできるので、自信にもなっただろう。この経験が年少、年中、年長と繋がっていくのではないかな。

(3) 年長児とお祭りごっこ

年長児とのふれあいは、日々の遊びで保育室を行

き来して遊んだり、戸外で遊んだりする中で、自然とできていると思う。年長児との遊びを満3歳児の子どもたちは魅力的に思ったり憧れの気持ちを抱いたりしながら見ているだけでなく、真似をしながら一緒に楽しんだりすることもある。そんな憧れの年長児が招待してくれるお祭りごっこは、子どもたちにとって大変楽しみにしている行事である。

【事例3】(2022年10月14日)

週のねらい：①戸外で先生や友達と伸び伸びと体を動かして遊ぶことを楽しむ。

②音楽に合わせて踊る楽しさを友達や先生と味わう。

大切にしたいこと：フェスに参加し、異年齢との交流を楽しんだりお祭りに親しみを感じたりする。

援助と環境構成：お祭りごっこを子どもたちと楽しみ、満足感を味わうよう一人一人の気持ちに寄り添い共感する。

お祭りごっこに参加する前に、お店の紹介をしたりスタンプラリーのカードを見せたりすると、子どもたちはワクワクした気持ちになっていた。

2人ずつペアになって園庭で展開されている8つのお店を回っていく。ヨーヨー釣りでは、いろいろな形や柄のものがあつたので、どれにしようかと迷いながらも取りたいものを狙い集中してヨーヨー釣りを楽しんでいた。年長児のお祭り屋さんでは、年長児が満3歳児の目線で話しかけてくれたり、宝探しコーナーでは宝物が見えやすいようにしてくれたり、プレゼントを選ぶ際には「どれにする？」と聞いてくれたりと、年長児の優しい関わりに安心してそれぞれのゲームを楽しんでいた。

最後は綿菓子もらった。初めて綿菓子の味に出会う子どももいて、お祭りならではの味を楽しむことができた。

わくわくフェスウィークの最終日がお祭りごっこであった。ヨーヨー釣りや綿菓子はPTA役員の

ブースとして展開されており、一部の保護者との交流ができるようになっている。年長児は「お祭り屋さん」として自分たちがグループごとに考えた遊びのコーナーを展開し、園の子どもたちを招待して楽しんでいた。

「順番に並んでね」「一人ずつね」という言葉が必ず各ブースから聞こえてくる。景品についても「どれにする？1つ選んでね」と言われる。遊びの中で満3歳児であっても「1つ」を経験する。年長児は自分たちもこれまでの園生活の中で経験してるので、優しく伝えられるようになっている。だから、「年長児が怖い」という意識もなく、自然と年長児の話が受け入れられるようになっている。集団の中で年長児から刺激を受けながら育っていくと考えられる。

また、同じクラスの友達とペアになってブースを回っているの、友達を感じることもできる。「保育者と一緒に」という感覚だけではなく、「友達と一緒に」という感覚も生まれてくるだろう。

(4) スポーツレク(運動会)

満3歳児におけるスポーツレクは、入園予定の子どもがほぼ揃う秋に行うことで、みんなで楽しさを感じられるようにしている。この時期になると、1学期から既に入園している子どもたちが楽しんできたことを含めて、2学期から入園してきた子どもたちも一緒になって楽しむようになる。子どもたちは色々なことに意欲的で、初めてのことにも友達同士で真似をしながら楽しむことがとても嬉しく思えるようになっている。音楽や保育者の声に合わせて、リズムをとって何度も何度も繰り返しリズムに乗って体を動かす遊びを楽しんでいる。

毎日、保育者や友達と楽しんできたことをスポーツレクでは、親子で楽しんではほしいと考えている。保護者がいると一緒にいたい気持ち、抱っこしてほしい気持ちが高まるのは当然のことであり、保護者の傍にいきたくなるのが当たり前の気持ちである。そのような気持ちを、涙をこらえて我慢させることよりも、安心感をもって過ごすことが、この時期の子どもの育ちの中では優先された方がいいのではないかと考えている。保護者の傍で一緒にいたい気持ちを大切に、かけっこではゴールにいる保護者

に向かって走り、ゴール後に抱っこしてもらいその嬉しさや喜びを感じる。また、親子での触れ合い活動では、親子でリズムに合わせて踊りを楽しむ。その時間は、満3歳児の子どもたちにとっては何より幸せな幼稚園での時間となり、今後の幼稚園生活への意欲にも繋がっていくと考えている。保護者から離れて保育者と過ごす幼稚園という社会が、子どもに楽しい場所として認識を深められることが大切であろう。保護者にとっても、幼稚園という離れたところで笑顔いっぱいを楽しんでいる子どもの姿を感じられることは、何より安心感に繋がると共に、思い出に残る時間になると考えている。

【事例4】(2022年10月27日)

週のねらい：スポーツレクでお家の人や友達、先生と一緒にそれぞれの競技を楽しみ、体を動かすことへの心地よさや楽しさを味わう。

大切にしたいこと：今まで楽しんできたことをお家の人に披露したり一緒に楽しんだりすることを大切にする。

援助と環境構成：見通しをもって動けるよう職員間連携をとり、1つ1つの競技を思いきり楽しめるようにする。

スポーツレクの本番。「よいいドンを頑張る」という声や「お母さんが来るんで（楽しみ）！」など、一人一人の中でスポーツレクへの気持ちが高まっている。スポーツレクが始まるまでの時間で返事をしてみたり、「フルーツポンチ」を踊ったりして心も体も準備して、かけっこへと向かった。

本番では、いつもと少し違う雰囲気を感じたり、大好きな家族が来ていることが嬉しかったりして、ドキドキする姿も見られた。かけっこではゴールに向かって一生懸命に走り、親しんできたダンスでは家族と一緒に踊って楽しむことができ、子どもたちから「楽しかった！」という声が聞こえてきた。

年少・年中・年長児のスポーツレクは、5月末に開催している。年長児は秋にもう一度「レッツ・チャレンジ」という形で運動遊びを中心に開催した。満3歳児は、入園予定の子どもがほぼ揃うということで秋開催である。年長児は運動遊びが中心とはいえ、踊りたい気持ちもあるのでダンスも取り入れている。年長児が音楽やリズムに合わせて踊っている姿を目にすると、「自分たちも踊りたい」という気持ちにもなってきた、リズムに合わせることが楽しい時期になっている。普段の遊びの中では、いつも顔を見ている友達と一緒にリズムに合わせてふれあい、当日までに保護者と踊るパートも友達と楽しんで踊ってみる経験を重ねてきている。その上で当日を迎え、保護者との楽しいふれあいの時間となっている。

満3歳児の競技は、保護者のいる場所に向かってのかけっこ、ふれあい踊りが中心なので、「体を動かすと楽しい」という気持ちになるようにねらいを立てている。緊張感をもっていると体は思うように動かないので、まずはリラックスすることを大切にしたい。その後にリズムを感じて自分なりに体が動いていく、友達と同じように体を動かしてみることで、楽しさを共有していけたらと思う。その楽しさをさらに保護者とも共有し、子どもの中で「幼稚園が楽しいな、嬉しいな」が積み重なってほしいと思う。保護者には、子どもが笑顔で伸び伸びと活動する姿から、園生活の中で子どもの成長を感じられる行事となるよう、工夫している。それが園に対する安心感、信頼感に繋がってほしい。

(5) わくわくステージ（生活発表会）

わくわくステージは、満3歳児にとって初めて舞台に立ち、たくさんのお客さんの前で何かをするという経験の場である。保護者が目の前で見ていることが嬉しい子どももいれば、保護者の傍に行きたくなくて保護者を見つけると泣いてしまう子どもも予想される行事である。そのため、保育者はそれぞれの子どもたちが大好きなことを中心に内容を考えていくようにしている。その内容は、スポーツレクと同様に、これまでの保育の中で楽しんできたことを中心とし、子どもたちが舞台上で楽しく披露できるように工夫している。日々の楽しいことの中のひとつ

を披露するので内容に負担はないと思われるが、場所が保育室から舞台になるという問題がある。そのため、年少児や年中児の劇遊びを観に行ったり、舞台上で保育者や友達と遊んでみたりする経験を重ねて、舞台が楽しい場所になった頃に、わくわくステージに向けた活動を楽しむようにしている。

【事例5】(2022年11月25日)

週のねらい：わくわくステージを通して、みんなで表現する楽しさを感じるとともに、お家の人に見てもらうことで充実感を保育者とともに味わう。

大切にしたいこと：今まで親しんできた表現遊びをお家の人にも披露して充実感を味わい、みんなと表現することの楽しさを感じる。

援助と環境構成：ステージでの頑張りを一人一人認める言葉掛けをして充実感を味わえるようにする。

わくわくステージ当日。朝の集いでは、A児とB児が「今日ママとパパが来るんだよ。Aちゃんは誰が来るの?」「ん～、ママとパパだよ」と話をするなど、家族が来ることを楽しみにしているような声が聞こえてくる。劇遊び(本番)が始まるまでは、「おべんとうバス」の絵本を劇遊び風に読んだり、手袋シアターをしたり、手遊びをしたりして気持ちを高めていった。「笑顔で楽しむこと、ドキドキした時はステージの上にも先生がいるし、ピアノの前にも先生(担任)がいるよ」と伝えてからステージに向かった。

本番はたくさんの観客にドキドキすることもあったけれど、大好きな家族がいることで張り切っていつもより大きく表現したり、手を振ったりしていた。子どもたちは「楽しかった」と言いながらステージから降りてきた。

この事例は当日のことであるが、それまでに舞台上に慣れるために、まずは今までに楽しんだことのある手遊びや歌、体操を舞台でしてみた。時には走ったり寝てみたりして、保育室のように安心できる場

所としての認識が生まれるように工夫した。年少・年中児の「お客さん」が来ている時に「お客さん」の方に向いて遊びをしてみると拍手がもらえ、嬉しい気持ちになった。その積み重ねから、舞台も楽しい場所となっていたのだろう。

これまでの行事を見ると、わくわくフェスウィークでは、自分の作品を保護者に見てもらう経験をした。ホールはいつも遊んでいる場所の1つであるため、子どもにそこまでの緊張感はないようだ。今まで遊んできたものが展示されているので、手に取って保護者と遊ぶことができ、楽しい経験である。スポーツレクでは、保護者と一緒に踊る楽しさを味わい、リズムや曲に合わせて動く楽しさを感じる経験をした。園庭は毎日伸び伸び遊んでいる場所なので、開放感がありリラックスできる。そこで保護者と一緒にふれあい、また友達と同じことを同じ場所で行い友達を感じることもできた。

しかし、わくわくステージは、子どもたちが経験したことのない初めての場所での表現活動である。そのために、舞台上に慣れる様々なステップを踏んだ。当日も同様に配慮が必要となる。当日の工夫としては、直前までステージに関連する手遊びなどを取り入れ、気持ちを高めるようにしていた。舞台袖にはフリーの保育者や補助の保育者が、舞台下には担任がいることを事前に伝え安心感が持てるようにもした。見守ってくれているという安心感があり、保育者のサポートが重要であると感じる。

(6) 2学期終業式

2学期は、クラスの子どもの人数が増えることで、友達をたくさん感じる学期となる。そして、年上の子どもたちとのふれあいや様々な行事の経験を通して、友達と一緒に楽しいと感じたり、自分がやりたいと思った遊びを十分に経験したりしたことで、満足感や嬉しさを感じる時期である。

この頃になると、帰りの時間に「帰りたくない」と言うなど、まだまだ幼稚園で遊びたいと泣く子どもが出ることもある。幼稚園生活がとても楽しくなり、自分で楽しい遊びを見つけて遊び込むことができるようになってきたと子どもの成長を感じることができる。保護者の手を離れ、幼稚園という社会で自立していく様子が伺え、保護者にとっては嬉しく

もあり寂しくなる時期なのかもしれない。

子どもの成長著しい2学期であるが、幼稚園では冬休みを迎える。その節目として、保護者と保育者が一緒に子どもの成長を喜び合い、共感し合える節目の行事として、終業式を考えている。そして、3学期の幼稚園生活に期待を膨らませながら冬休みを過ごしてほしいと願っている。

【事例6】(2022年12月23日)

週のねらい：クリスマスの雰囲気味わい、年末年始の行事に楽しんで参加する。

大切にしたいこと：2学期の思い出を振り返ったり、友達や先生と楽しく過ごしたりして、来年を楽しみにする。

援助と環境構成：終業式に参加し、学期の区切りであることを知り、健康で楽しく過ごすことができたことに喜びを感じられるようにする。

終業式の前にアート展、スポーツレク、わくわくステージでの劇遊びという2学期にクラスで行った行事のことを映像で振り返った。「かけっこ、たのしかった」「みんなでおべんとうバスしたよね」など、思い思いに呟いていた。年長児の合奏や歌では、いろいろな楽器を演奏する姿や音、大きな声で歌う姿に憧れの眼差しを抱いていた。演奏や歌が終わった時には、「すごかったね」「かっこいい」の声で溢れていた。

満3歳児クラスは2クラスあるが、1組は4月に5人でスタートした。5月に4人増え、6月で2人増えた。7月にも1人増え、1学期の段階で最終人数の過半数12人となった。夏休み明けの9月には3人加わり、10月には4人増えた。この段階で19人なので、クラスとしてほぼでき上がってきていた。11月・12月入園の子どもがいなかったこともあり、2学期の振り返りが可能となった。なお、振り返った行事は10月～12月なので、振り返り時点でこれらの行事には全員が何らかの形で参加をしていた。

そこで、2学期を終える節目として終業式が行わ

れる前にクラスの振り返りを行うことになった。行事を中心にどんなことがあったのかを子どもたちと振り返りながら、楽しかった思い出を語り合った。その活動の中で「幼稚園でみんなと遊ぶと楽しい」という思いが少しずつ湧いてきたことだろう。さらに1つ1つの行事が、子どもたちの中で「楽しかった」「これをやったんだ」など、思い出となり自信に繋がっているようだった。この日を境に冬休みとなるが、1月になって友達と遊ぶのが待ち遠しい気持ちになったのではないかな。次を楽しみにするためには、振り返ることも大切だと感じた。

また、振り返りにおいて映像を用いたが、このように映像があると伝わりやすく、思い出を子どもたちで共有しやすいと思われる。夏休みの思い出で水族館に行った複数の子どもが2学期の初めに水族館のことを語ったことで、ICTを用いて水族館のイメージを共有した⁸⁾ように、子どもの中で同じイメージが共有され、友達や保育者と一緒に活動する楽しさや嬉しさを再度味わうことができたのではないだろうか。

4. 2学期の行事を踏まえた3学期の保育活動

2学期の行事への参加の経験を通して、「友達と関わるのが楽しい」「友達や先生がいると安心できる」という気持ちが育ってきた。保育の中でも、ねらいとしてそれらを大切にしてきた。

このような成長著しい時期を終え、3学期には、これまで一緒に楽しんできた遊びを友達を感じながら一緒に遊んだり、年上の友達との遊びを楽しんだりして、色々な友達との経験を楽しんでほしいと願っている。

その願いを受けて、3学期の活動として保育者と一緒に簡単なルールのある遊びを取り入れる計画を立てた。

【事例7】(2023年1月17日)

週のねらい：友達に興味をもち、遊びを通して関わろうとする。

大切にしたいこと：戸外で友達や先生と体を動かして遊ぶ楽しさを感じ、心地

よく過ごす。

援助と環境構成：簡単なルールのある遊びを取り入れ、友達や先生と体を動かす楽しさを一緒に感じられるようにする。

戸外に出かけると1段の跳び箱が3つ並んでおいてある。跳び箱の山に興味を示し「やってみたい」と、跳び箱に上がってジャンプすることを繰り返して楽しむ。1段だと怖さを感じないようで「できた!」「たのしいよ!」という声がたくさん聞こえてくる。

繰り返し遊んでいるうちに、跳び箱から跳び箱に飛び移れるかチャレンジする子どもが出てくる。順番に跳び箱から跳び箱に飛び移りながら、最後の跳び箱から降りる時にクルリと回って降りるなど、それぞれの降り方を楽しむようになった。

跳び箱をする人数が増えてきたので、ケンケンパーができるフラフープコーナーも用意した。子どもたちはフープをめがけてジャンプしたり、フープを集めて体に通して回してみたりと、新しい遊びも考えていった。

生活の中では、「順番に」ということがよく言われる。子どもたちも「順番」という言葉は理解している。しかし、まだ自分の気持ちが先に来るので順番を守ることが難しい時もある。順番を守りながら遊ぶ経験は、楽しい中で少しでも我慢する経験である。このような経験を通して、生活の中で順番を守るとスムーズで心地よい気持ちを感じる。これが積み重なって、普段の生活の中でも順番を守ることが出来るようになるのだろう。

また、右から左に移っていく、フープの中を通っていくという簡単なルールを守る遊びの経験からは、少し条件やルールがあると「チャレンジできて楽しいね」と感じるができるのだろう。チャレンジが楽しくなると、様々な遊び方を考え、子どもたちのチャレンジが増えていく。そのチャレンジを子どもたちで共有しながら、ルールのある遊びが少しずつ発展していくのではないかな。

【事例8】(2023年2月6日)

週のねらい：先生や友達と一緒にごっこ遊びやルールのある遊びに親しみ、やり取りや一緒に遊ぶことへの楽しさを感じられるようにする。

大切にしたいこと：友達や先生とそれぞれがしたい遊びを楽しみ、安定した気持ちで過ごす。

援助と環境構成：一人一人の気持ちを受け止めながら、したい遊びが見つかるような言葉掛けや環境づくりに配慮する。

戸外で、友達や保育者とかくれんぼや「鬼ごっこ」を楽しむようになってきた。かくれんぼでは、見つける役と隠れる役のどちらにするか、それぞれが選んでやりたい役をする。見つける役の時には「〇〇ちゃん見つけた!」と喜び、隠れる役の時には友達や保育者に見つからないように「ここに隠れよう」「あそこのほうがいいかな?」など、場所選びでドキドキした様子を見せていた。

「鬼ごっこ」では、B児が「ぼくがオニになる!」と張り切ると、A児が心を動かされ「私も!」と2人でオニをする。オニが分かりやすいように「帽子の色を変えてはどう?」と保育者が提案すると「いいね!」と大賛成で走っていった。

2月になると、友達と簡単なやり取りも楽しめるようになっていく。ルールを感じるとともに気の合う友達と遊ぶことの楽しさも感じているようだ。

保育の中では、子どものやりたい気持ちや心が動くことを大切にしたいと考えている。そのため、子ども自ら「～したい」「～しよう」という積極的な姿を大切にしている。初めは、年長児たちが行っている魅力的な遊びに参加させてもらいながら、逃げたり捕まえたりという「鬼ごっこ」をはじめとするオニ遊びの楽しさを感じる。そのうち、「捕まったらオニ（交代）だよ」と言われ、少しずつオニ遊びのルールを覚えてくる。

年長児に支えられながらオニ遊びのルールを覚えてくると、クラスの子どもたちとオニ遊びを行うよ

うになる。クラスの友達とも捕まえる喜び、逃げる楽しさを感じ、簡単なルールの中で友達と遊ぶ楽しさを味わえるようになっていく。

5. まとめ

以上のように、1学期は少人数で少しずつ園生活に慣れることから始めた。バスでのこいのぼりツアーを経験し、「幼稚園って楽しいな」という気持ちを保育者と感じられる経験を大切にした。

2学期には、様々な行事に参加するようになる。様々な行事が行われる2学期であるが、「行事の指導に当たっては、幼稚園生活の自然の流れの中で生活に変化や潤いを与え、幼児が主体的に楽しく活動できるようにすること」⁹⁾とされているように、普段の生活の延長として行事を計画することを大切に、子どものストレスにならないように配慮を行ってきた。楽しい気持ちと同時に不安も味わうかもしれないわくわくステージでは、普段から親しんでいた大好きな「おべんとうバス」の絵本を劇遊び風にしたため、子どもたちが「楽しかった」と舞台から降りてくることができた。このような配慮から、子どもたちが「行事って楽しいな」と思えるようになり、積極的に友達や保育者と園生活を送れるようになっていくのだろう。

満3歳児は、「やりたい」という気持ちが強い時期である。楽しいと思える様々なことに意欲的に参加し、そこから刺激を受ける。それは子どもによって異なるかもしれないが、日常における友達や保育者との遊びであったり、行事であったりする。楽しい行事などを体験する度に刺激を受け、子どもたちは成長していくので、行事間で育ちは繋がっていると考えられる。

満3歳児での入園を受け入れる場合、幼稚園での教育期間が4年弱となるので、子どもの発達を見通し、これまでの教育課程も見直す必要があるだろう。行事を例に考えると、満3歳児入園の子どもはスポーツレクを4回経験する場合がある。そこでは、3歳児・4歳児・5歳児と演技や競技の難易度を上げ、完成度を高めていけばよいわけではない。「運動会という節目に向け、発達によりどのような遊びや生活を積み重ねていくとよいのか、また、運

動会後の活動への連続性をどのようにしていくとよいのか、運動会当日の参加の仕方、保護者への幼児の姿の発信等も含め、様々なことを想定し配慮していかなければならない」¹⁰⁾とされるように、3年保育の子どもたちと同じような援助ではないはずである。満3歳児の発達に応じ、自然な流れの中で子どもたちが楽しく活動できるように計画していくことが求められるだろう。

そのために、満3歳児には満3歳児に応じた教育課程が必要であると考ええる。「特に満3歳児には、幼児一人一人の家庭との連携を図り、園においても、家庭での生活リズムでゆったりと過ごしたり、自分のペースで遊んだりできるような時間や場、そして、何より教師とのスキンシップを通しての心のつながりを保障する」¹¹⁾ことが重要であるといわれるように、少しずつ園に慣れ、「幼稚園って楽しいな」という気持ちを感じられる経験が求められるだろう。さらに満3歳児は段階的に入園してくるため、途中から入園する子どもとの出会いもある。時には不安になるかもしれないが、保育者との信頼関係を基盤に子どもたちが伸び伸びと楽しく遊べるよう、「自らの興味や関心、能力に応じて環境に関わりそれに応じて環境からの応答を受け取るといった相互交渉の中で、幼児が自我の芽生えとともに自己を表出する喜びを感じていける」¹²⁾ような援助が必要となってくるだろう。

それらのことを踏まえ、今後の課題として満3歳児からの教育課程を見据え、子どもの発達に応じた行事の精選や指導計画の作成を行っていきたい。

なお、本研究に協力いただいた香川短期大学附属幼稚園の全ての関係者の皆様にこの場をお借りして感謝とお礼を申し上げたい。

註

1) 文部科学省(2021)「幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開」

https://www.mext.go.jp/content/20210301-mxt_youji-000013093_01.pdf (2023/11/27)

2) 同上

3) 牧正興(2007)「幼稚園満3歳児入園における保育内容(人間関係の課題と展望):満3歳児入

- 園調査研究委託の実践を通して」『福岡女学院大学紀要 人間関係学部編』 8, pp.99-105
- 4) 田澤里喜 (2012)「幼稚園における満3歳児入園の現状と課題—都道府県の実施状況を中心として—」『論叢：玉川大学教育学部紀要』2011, pp.19-35
- 5) 今村光章・森口優歩 (2020)「岐阜県内の私立幼稚園における満3歳児保育の現状と課題—満3歳児保育のカリキュラム開発を目指して—」『岐阜大学カリキュラム開発研究』 36, pp.58-67
- 6) 小久保篤子「幼稚園教育における資質・能力の育成に向けた教育活動の充実」文部科学省『初等教育資料』1009, p.9
- 7) 林美代・廣瀬三枝子 (2023)「幼稚園における情報機器活用の取り組み—イメージの共有化をその後の保育活動に繋げるために—」『香川短期大学紀要』 51, pp.107-115
- 8) 同上
- 9) 文部科学省 (2017)『幼稚園教育要領』フレール館, p.11
- 10) 前掲1)
- 11) 同上
- 12) 同上